

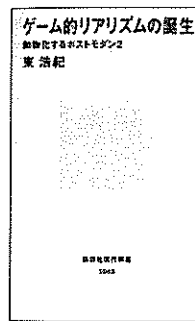
き合うことに耐えられなくなってきたのだ。

日本国内では、東浩紀の言う「ゲーム的リアリズム」が挙げられるだろう。東は、大塚英志と伊藤剛の議論を参照しながら、日本の漫画やアニメの中で蓄積されてきた「キャラクター」という概念のメタ物語的な性質に注目する。同人誌市場などにみられる二次創作の興隆は、キャラクターが単一のオリジナルな物語から自律し、複数の物語に生を見出せることを示している。逆に言えば、その種のキャラクターを含んだ物語は、「キャラクターがメタ物語的な結節点として与えられているがゆえに、あらゆる物語に対して別の物語への想像力が半ば自動的に開かれている」(『ゲーム的リアリズムの誕生』)状態にある。「ゲーム的リアリズム」とは、そのようなキャラクターを介した別の物語への想像力を、ひとつのテキストの内部に取り込んだような物語である。その登場もまた、テキストからテキストへ、絶えず関心を移していくハイパーテキストのリアリティに対応していると考えてよい。

私たちはここまで、ネットの普及に伴う私たちとテキストの関係、そしてテキストそれ自体の変化を見てきた。ひとつ確かなことは、これらの連鎖的な変化が、すべて不可避なものであるということだ。私たちは既に、

ネットを欠いた生活を想像できなくなっている。である以上、これらの変化をいたずらに悲劇として喧伝するのはなく、むしろその変化を前提条件として折り込んだ上で、いかなるテキストのかたち、いかなる読書のかたちがあり得るのかについて、議論を重ねることがますます必要となるだろう。

(筆名・関西大学文学部四年次生)



『ゲーム的リアリズムの誕生
—動物化するポストモダン2—』
東浩紀 講談社現代新書
2007年3月刊 339頁
本体価格 800円

〈わかりあう〉ことへのアプローチ

—キンチョールジェットと豊川悦司—

園田 浩 司



(カット・山本弥生)

キンチョールジェットのCM

「お前が蚊嫌いやゆうから、キンチョールジェット買ってきてやっただけやないか。」

「なんで、キンチョールジェットが一〇万円もすんのよ」

「ええやないか、細かいことは……」

いかにも蒸し暑そうな部屋の中で、男が女にだらしないくまどわりついている。男は左手にキンチョールジェットをもち、甘えた声でなにやら女に弁解している。数年前に見た豊川悦司が出演していたキンチョールのCMが、この夏、頭にこびりついて離れない。このCMは何か私

たちに、〈わかりあう〉とはいったいどういうことかというあまりにも大きな問いに対する、重要な手がかりを与えてくれているという気がしてならない。その意味でのCMは、もはやキンチョールのCMであるということにそれほどこだわるべきではないのかもしれない。ところが、むしろそうであるからこそ、こうして今でも頭に残ることになっているともいえる。そうだとすれば、このCMはキンチョールジェットが画面におさまっていないければ、(記憶に残るという意味で)偉大なCMとはならなかったのかもしれない。

このように、キンチョールのCMでなくてもよいような気もするし、そうでなければならぬような気もするという、きわどい線状にしろろろろ位置しているという

点こそ、このCMの偉大さなのかもしれない。筆者がこの論考で差し迫りたいのは、このCMに私たちが具体的に「見たもの」である。そして、そこから、「わかりあう」ということに対するある提言を読み取りたい。

キンチョールジェットの動き

CMを見た誰もがもつとも強く記憶しているのは、おそらく豊川悦司（以下、トヨエツと省略する）のだからし

ない男の演技ではないだろうか。そこで、ここからトヨエツとキンチョールジェット（以下、ジェットと省略する）が作り出すある運動について細かく見ていくことにしよう。

①（トヨエツ）「お前が蚊嫌いやゆうから、

（ジェット）身体の半分以上を、画面から外にはみだしている。頭（ノズル部分）を画面右方向に投



©大日本除虫菊株式会社

げ出すようにして、倒れかかっている。

②（トヨエツ）直立し、身体全体を画面のなかにおさ

める。ただし、トヨエツが左手でつかんでいる部分は、隠れている。

③キンチョールジェット（と、ジェットから視線を外し、再び画面左の女のほうに向けるが、一瞬女の力オに向けるが、視線は下方方向に向いている）買うてきてやつただけやないか。」

（ジェット）再び、身体を倒し、画面からはみ出す

ここで注目したいのは、トヨエツの演技がキンチョールジェットをどのような存在に仕立て上げているかという点である。トヨエツはまず、だらしなくキンチョールジェットを左手に抱えている。このだらしなさは、キンチョールジェットを画面からはみださせ、一見何のCMかと忘れてしまうほどの存在の薄さを提示することに一役買っている。ところが、「キンチョールジェット……」とトヨエツがはじめて口にしたとたん、キンチョールジェットは、まるでこれが自分のCMであったと思いつくかのようにすつくと立ち上がり、自らの身体を画面にさらけ出す。しかしそれはほんの一瞬であり、ふたたびキ

ンチョールジェットはだらしなく、ボディを画面に横たえるのである。そうなのである。トヨエツは始終、いかにもさりげなくだらしなさを装っているのだが、「キンチョールジェット」の宣伝であることを決して忘れてはいない。彼はあまりにもさりげなく、キンチョールジェットに視線を送り、そしてあまりにもさりげなくキンチョールジェットをそつと立てることによって、私たちの視線をキンチョールジェットに送ることに見事に成功しているのである。このとき、キンチョールジェットの正面（すなわち視線）は、画面のこちらよりわずかばかり左を向いている。運動とは、この二者の視線の方向と、キンチョールジェットの動きのことである。

〈沈黙度〉の高いものと「コミュニケーションをとる

ところで、どうも私たちに「何を考えているかわからない相手」と「わかりあいたい」という憧れがあるようだ。たとえば、従順なイヌよりも奔放なネコのほうが好きだという人は、ネコに話しかけるといつた経験があるだろうし、さらには生まれたての赤ちゃんにも私たちは話しかけたりするものである。

これまでKINCHOのCMは、かねてから異彩を放ってきたようだ。なかでも、八〇年代に、郷ひろみと横

山やすしが、目の前のバケツに「ハエ蚊退治にキンチョール。言えっ！」と詰め寄るCMは、残念ながら筆者はリアルタイムで見たことはないが、あまりの斬新さに、記憶に残っている。そのCMを手がけた川崎徹は、「沈黙度の高いものと、どうやってコミュニケーションをとっていくか」ということに関心があると述べている。彼のいう「沈黙度の高いもの」というのは、いったいどういうことなのだろうか。

たとえば、「茶碗とバケツを比べると、バケツのほうが沈黙度が高い」と彼は言うが、茶碗は用途が限定されており、したがってある男と茶碗だけが画面に映し出されるとき、両者の関係を、こちら側が勝手に考え了解してしまうということかもしれない。

つまり、沈黙度が高いというのは、「その物が何かと一緒におかれたとき、両者の関係をおしはかることがどれほど難しいか、その度合い」のことを言っているのではないだろうか。さらには、そのとき「その物それ自体が何を考えているかわからない」状態をさらけだしはじめると、バケツと郷ひろみ、横山やすしがそこに居合わせたとき、バケツは何を考えているかわからない存在として、私たちの目の前にたち現れてくるのである。

キンチョールジェットの沈黙度

ところで、キンチョールジェットはどうであろうか。こう考えると、キンチョールジェットそれ自体は、まったくといっていいほど沈黙度が低いのである。なぜならば、キンチョールジェットの用途はひとつである。それは、蚊を退治する。そのことに尽きている。にもかかわらず、キンチョールジェットがトヨエツと、ある運動をふまえることで、沈黙度を高めているのである。繰り返しておくが、沈黙度が高くなるほど、私たちはそれにますます興味を覚えるのである。

たとえば、このような状況を考えてみよう。

トヨエツが左手にビール瓶を抱え、やはり女にまわりつく。

キンチョールジェットは画面手前に置かれている。

このように変えたとき、キンチョールジェットは運動をすることをやめる。つまり、キンチョールジェットはトヨエツの手から離れ、画面でじつと静止することになる。こうなると、おそらくキンチョールジェットの存在は、私たちにとって少しうっとうしいものとなるのだ

考えているかわからない度合い」(つまり沈黙度)は、ますますあがっているのである。

〈わかりあう〉ことへのアプローチ

トヨエツとキンチョールジェットの一連のやりとりからわかることは、相手の沈黙度を高めようとしあうコミュニケーションこそ、〈わかりあう〉ということに対するアプローチなのではないだろうかということなのである。キンチョールジェットは、トヨエツと視線を合わせない、にもかかわらずぎゅっと握られていることによって、沈黙度を高めるのに成功しているのである。相手と〈わかりあおう〉とするには、一見矛盾しているようだが、〈わかりあわないようにしよう〉とするアプローチがとられなければならないのではないかと、トヨエツとキンチョールジェットは教えてくれているのである。このように考えたとき、蚊とわかりあうことをやめたと見えるKINCHOは、実は蚊のことが大好きなのではないだろうか、という奇妙な妄想がはじまった。

(参考図書)

川崎徹「危ない橋を渡らせてもらった」二〇〇五『広告批評』特集KINCHO二〇〇年』マドラ出版株式会社

(そのだ こうじ・関西大学社会学部卒業生)